

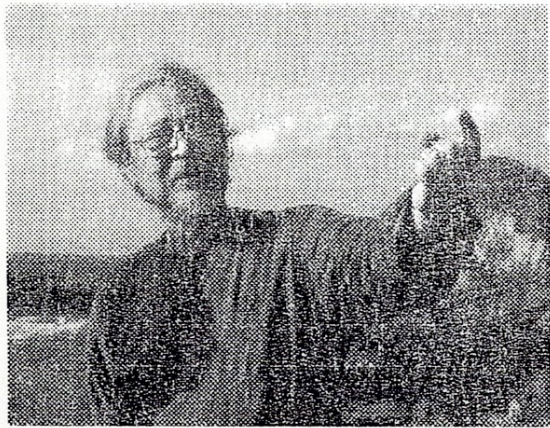
長野県小県郡長村(現・真田町)で日本の敗戦を迎えた登少年と弟・鉄二は、東京へ帰った家族と別れ、兄弟二人で信州の冬を過ごす。白土三平は信州で多くを学んだ。

遠い戦国時代のことだ。少年時代の白土三平が暮らした長村には反骨の武将・真田昌幸の城があった。昌幸は三万八千石の小さな大名だが、徳川家康と子・秀忠を怖れさせた戦のプロだ。昌幸の次男が「真田日本一の兵(つわもの)、占よりの物語にもこれなき山」と語られることになる真田幸村(信繁)だ。

白土史劇の基礎を育てた信州・長村の風土

真田昌幸はもともと武田信玄の家臣で、武田二十四将の一人だったが、武田が織田信長に敗れたため、信長の配下となっていた。

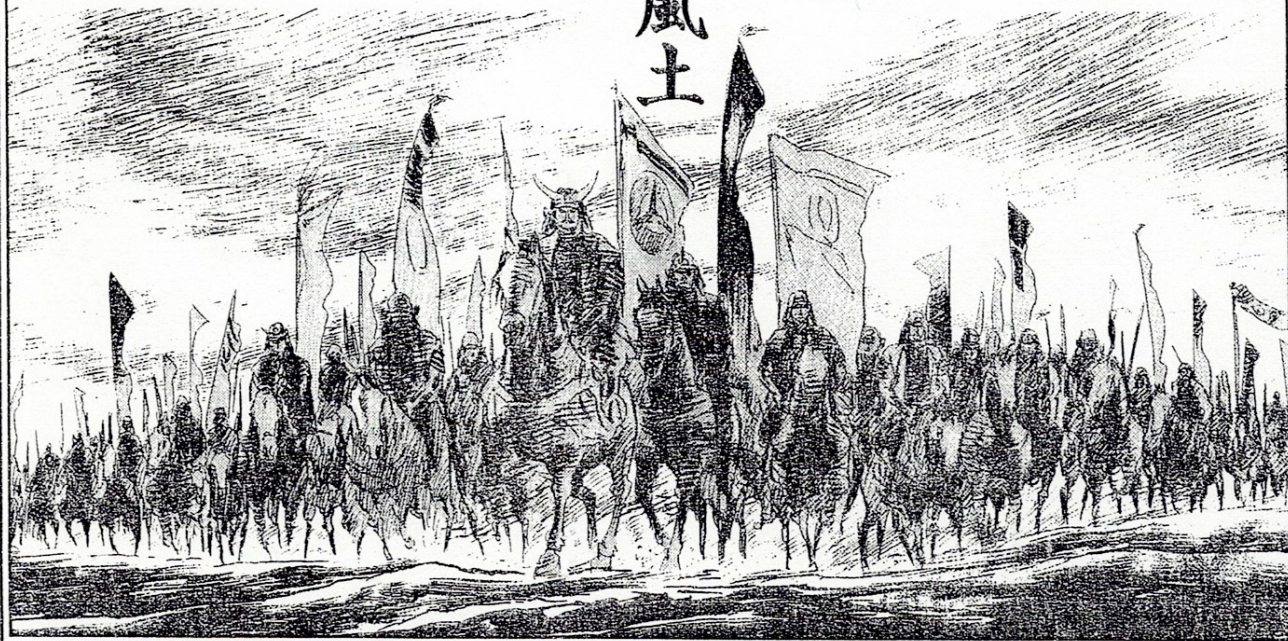
しかし信長が明智光秀に殺されると、激しい国盗りが始まる。相模(神奈川県)の北条氏政が上州に乱入し、さらに碓氷峠を越えて信州に出張ろうとしたため、徳川家康は真田昌幸を味方につけ、北条氏政を抑えることに成功した。ところが、北条氏政と家康が手打ちをおこなった際、秀吉と対抗するため火種を残したくなかった。



家康は真田昌幸が戦で手に入れた上州沼田の城を氏政にやる約束をした。家康は昌幸に、信州の土地と沼田と取替えるよう命じるのだが、明け渡した後に替地をやろうという家康の言い草に怒った昌幸は突っぱねてしまう。

激怒した家康は天正13(1585)年夏、七千余騎の軍勢を上田城に向かわせ、真田昌幸を潰しにかかった。知略家の昌幸は神川(かんがわ)ほとりの戦いで自軍を引いて油断させ、相手が懷に乗り込んだところを、二千余りの兵で散々に打ち破った。この遺恨によって、昌幸は豊臣秀吉に身を寄せることになるのである。十五年後の慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いを

直前に控えた家康は、子の秀忠に真田昌幸の討伐を命じる。昌幸は家康の勢力圏に居座る不気味な存在だった。秀忠の軍勢は三万八千、一方の真田はわずか三千。ところが上田城は落ちなかった。昌幸と幸村は銃や弓矢を撃ちかける小さな窓(狭間)のついた塀を設け、川をせき止めて一気に放流して敵の退路を断つなど、さまざまな仕掛けをこしらえて籠城戦にのぞんでいたのである。



結局、上田城を攻め落とせなかった徳川秀忠は、関ヶ原の戦いに間に合わなかった。関ヶ原の戦いには勝ったものの、自軍の三分の一にあたる三万八千の兵を欠いて闘った家康は、大津(滋賀県)に到着した秀忠に会おうとしなかったという。

徳川方についた長男・真田信幸の嘆願によって、真田昌幸・幸村親子は死罪を免れた。高野山に配流となり、麓の九度山村で貧しい暮らしを送るうち、昌幸は亡くなってしまった。ふたたび真田家の武名が蘇るのは、関ヶ原から十四年後の大坂冬の陣である。

家康が豊臣家を滅ぼすために仕掛けたといわれる大坂冬の陣で、真田幸村は父親譲りの戦巧者ぶりを

信州の風景と暮らしが

「カムイ伝」を描く想像力の源となった

昭和20年、岡本登少年(後の白土三平)は、その伝説の足元で暮らしている。岡本一家の住んだ長村横尾の借家から、歩いて二、三分の距離に親友Sの食料品店があつて、その家には戦前の子ども向け娯楽読み物として人気を誇った立川文庫が何冊かあつた。立川文庫こそ、真田幸村の伝説をふくらませた「真田十勇士」を生んだ物語だった。登少年は猿飛佐助や霧隠才蔵の物語をむさぼるように読んだ。

昭和20年の春ころ、登少年は父唐貴から「もう

学校には行かなくていいぞと真面目な顔で宣告された。その夏、山を下りていく途中で親友のSとばったり出会った。

「岡本、知ってるか? 日本が戦争に負けたんだ」

「やっぱりな……」

父の予言が的中したのだが、まだ人には言えなかった。

「お母さん(Sの母)はどうしてる?」

「みんな公会堂の前で泣いてるよ」

戦争が終わると、唐貴は東京での暮らしを整えるため、祖母、母、乳飲み子の颯子、小学生の真を連れて東京に帰って行った。登と年子の弟鉄二は自活できるからという理由でしばらく長野に残ることになった。

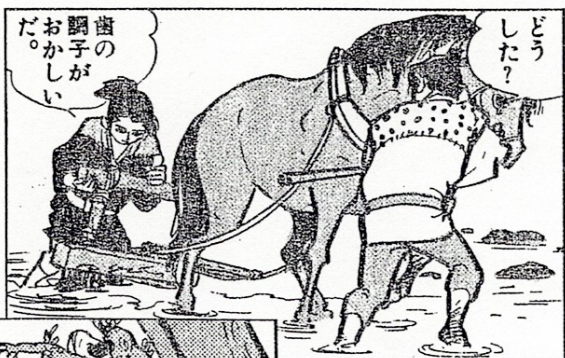
兄弟が長野から東京に呼び戻されるのは、登少年が14歳になる昭和21年2月のことである。

筆者は昨年12月に長村を歩いてみた。

登少年が学校で殴られた顔を冷やしたという洗馬川をながめ、薪やキノコを求めて歩いたという冬枯れた山を見上げた。岡本一家が暮らしていたという家のあたりに古い家並みと道の形が残っていて、親友だったS氏の家も残っていた。

少年時代の白土三平が通った道を歩きながら、今まで聞いたことのある長野の話の思い出してみた。

勤労動員でよその村に出かけた時、峠を越えて新しい村を見つめる。いつのまにか、その土地の豊かさ貧しさを見分けるようになっていて、国を盗る戦国大名の気分を想像した、という話。





ある時、火事が起こって岡本家の
わきを村人が集団で駆け抜けていっ
たことがあった。その足音の迫力に、
一瞬とはこういうものである
たかと想像したという話。

ある時、ハンターが滝壺に

いたオシドリを撃ったが、急所をはずれてしまった。「無
残な姿で」飛び去ったオシドリを隣村まで追いかけた
登と鉄二の兄弟は、最後に真冬の溪流に飛び込んで
獲物を取り押さえた。オシドリを抱え、ずぶぬ
れで身震いする兄弟を見たハンターは
そのオシドリをくれた。ネギと餅を
入れた鳥汁がうまかった、という話。

登少年の目に映ったそうした体験
が、後に紙芝居作家の暮らしを経て漫画家となった
白土三平の知識や世界観と結びつきながら、「カムイ
伝」という物語を育てていったのだった。

ある時、筆者は白土三平にこう尋ねたことがある。
「子ども時代の白土さんは大阪では在日朝鮮人の
人たちを、練馬では野菜農家を、長野では中塩田で
稲作農家を、長村では山の暮らしを見えています。どこ
かカムイや竜之進がいろいろな世界を眺めていく姿と
似ていますね」

「そうですね」

白土三平は静かにうなずいた。(長野編 終わり)



参考文献／『信州上田軍記』(堀内泰訳 ほおずき書籍)、

『真田幸村』(山村竜也著 PHP新書)、

『日本史小百科 戦乱』(安田元久編 近藤出版社)

構成・文／毛利甚八 写真／和田悟(白土氏ポートレート)

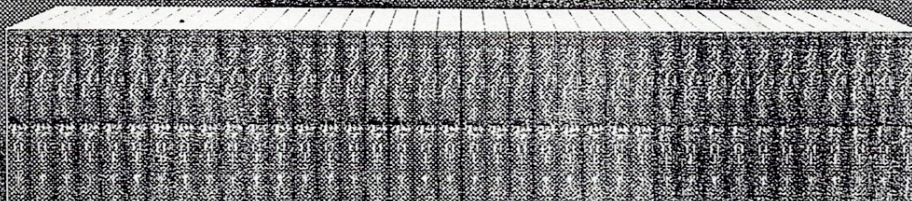
白土三平 西暦50年記念出版 決定版 カムイ伝全集 全38巻

[カムイ伝 第一部]15巻 [カムイ伝 第二部]12巻 [カムイ外伝]11巻

四六判並製／平均約400頁 定価(各)1,260円(税込) 全38巻揃い定価47,880円(税込) 第一部15巻揃い定価18,900円(税込)

[外伝] 第8・9巻 2月28日 発売

●毎月2点ずつ刊行 [第一部]第1～15巻 [第二部]第1～12巻 [外伝]第1～7巻 絶賛発売中



3月末
いよいよ完結!!

「カムイ伝全集」をより深く理解し、楽しむためのオフィシャル・サイトが大人気稼動中です。 www.shogakukan.co.jp/kamui/

— の気分を想像した、という話。